

杉塚 廃寺

筑紫野市文化財調査報告書

第 4 集

1979

筑紫野市教育委員会

杉塚廃寺

筑紫野市文化財調査報告書

第 4 集

1979

筑紫野市教育委員会

序

筑紫野市には大宰府関係の遺跡をはじめとして、数多くの遺跡が残されております。杉塚廃寺も周知の遺跡として、はやくから発掘調査の必要性が説かれていた遺跡であります。今回国の補助を得て発掘調査を実施し、ここに発掘報告書を発刊致す運びとなりました。本書が文化財保護の一助ともなれば幸いです。

尚、今回の発掘調査及び報告書作成にあたって御指導いただきました九州歴史資料館の諸氏ならびに発掘作業にご協力いただきました地元の方々に心から感謝の意を表します。

昭和55年 3月31日

筑紫野市教育委員会

教育長 萩尾 利弘

例 言

1. 本報告書は筑紫野市教育委員会が国・県の補助を受けて実施した杉塚廃寺の発掘調査報告である。
2. 調査は筑紫野市教育委員会が主体となり調査の実施にあたっては九州歴史資料館調査課の協力を得た。
3. 本書の執筆は下記のとおりである。
 - I山村淳彦
 - II 〃
 - III 〃
 - IV 〃
 - V奥村俊久・石松好雄
 - VI山村淳彦・石松好雄
4. 遺構および遺物の図面は山村・奥村が作成し、写真については九州歴史資料館の石丸洋氏にお願いした。
5. 検出遺構については九州芸術工科大学の沢村仁教授の指導を得た。
6. 本書の編集は石松・山村が行った。

目 次

序

I 調査に至る経過	1
II 位置と環境	3
III 調査の概要	3
IV 遺 構	5
V 遺 物	6
VI おわりに	15

図 版 目 次

図版 1	(上) 遠景 (南から) (下) S B 001 全景 (東から)
図版 2	(上) B トレンチ (北から) (下) A トレンチ (西から)
図版 3	(上左) C トレンチ (東から) (上右) D トレンチ (西から) (下左) E トレンチ (南から) (下右) F トレンチ (北から)
図版 4	遺跡周辺所在の礎石
図版 5	下層出土土器
図版 6	各トレンチ出土土器、土製模造鏡・石帯
図版 7	軒丸瓦・鬼瓦
図版 8	軒平瓦

挿 図 目 次

第 1 図	杉塚廃寺周辺遺跡分布図	2
第 2 図	トレンチ配置図	4
第 3 図	遺構実測図	5
第 4 図	B トレンチ東壁土層図	6
第 5 図	下層出土土器実測図	7
第 6 図	各トレンチ出土土器実測図	9
第 7 図	軒丸瓦拓影・実測図	11
第 8 図	軒平瓦拓影・実測図	12
第 9 図	叩文集成図	13
第 10 図	土製模造鏡・石帯実測図	14

I. 調査に至る経過

筑紫野市大字杉塚に廃寺があることは早くから知られており、これまでも多数の古瓦類が地元の人々によって採集されている。この地は天道寺あるいは无動寺跡とのいい伝えもあり、現在竹林の中に3個の礎石が露呈しているとともに付近の民家の庭などにも礎石^{註①}と考えられるものが散在している。

この杉塚廃寺については昭和48年市道側溝工事の際一部調査が行われており、掘り込み地業による建物基壇の一部が検出されている。しかしながら礎石が現存している一帯についてはこれまで調査は全くなされていない状況であった。^{註②}昭和53年家屋増築にともなう発掘届が提出され、これを受けた筑紫野市教育委員会は県文化課とも協議を重ね、国・県の補助を受けて緊急発掘調査を実施することとした。調査は筑紫野市教育委員会が主体となり、九州歴史資料館の協力を得た。

註① 長沼賢海『邪馬台と大宰府』太宰府天満宮文化研究所 昭和43年

註② 福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』Ⅳ 昭和49年

調査期間

昭和54年7月9日～8月2日

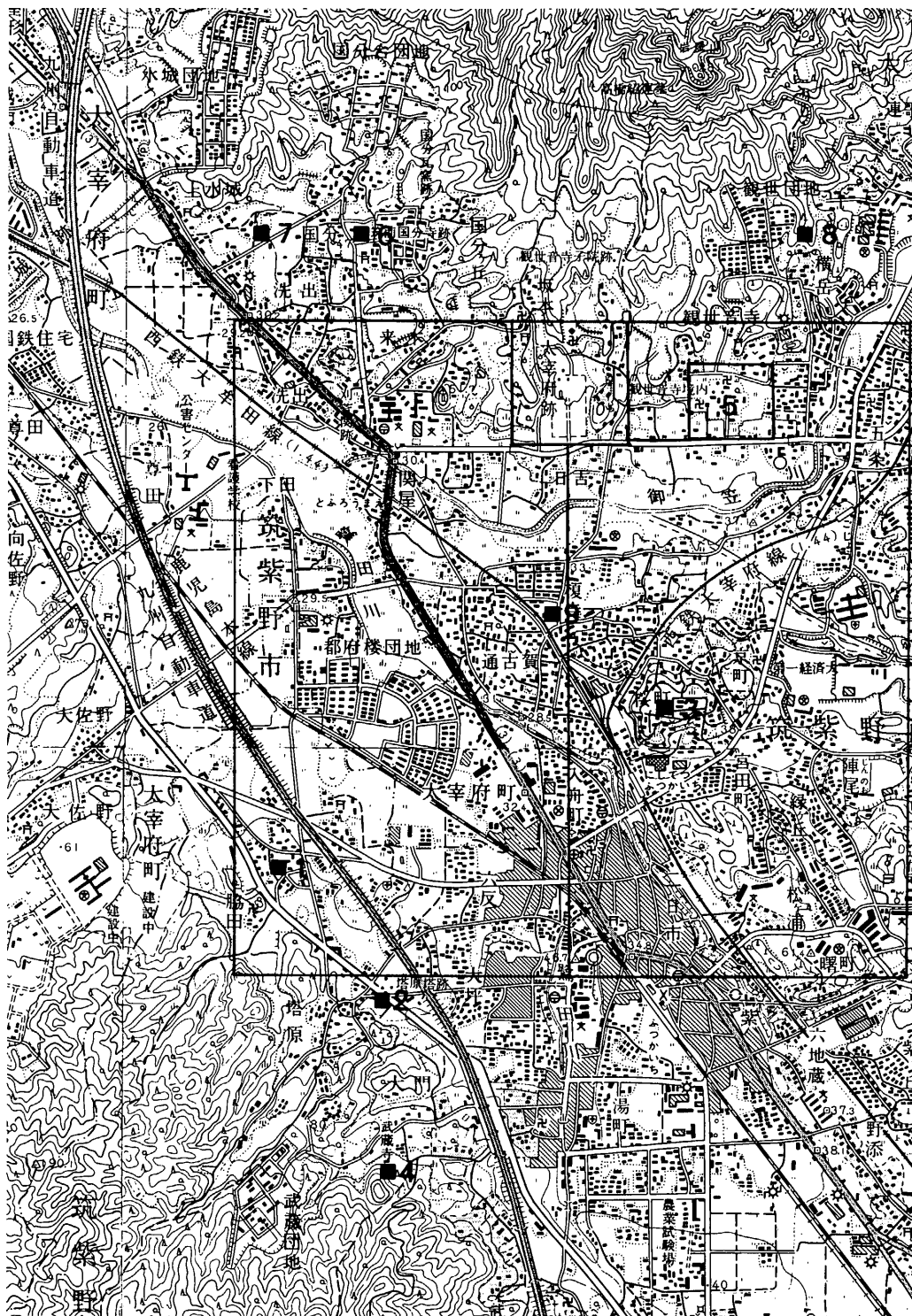
調査関係者

筑紫野市教育委員会

教育長	萩尾利弘
社会教育課長	武藤久雄
同 係長	竹田征治
同 主事	山野洋一
同 主事	山村淳彦（調査主任）
	奥村俊久（補助員）

九州歴史資料館

調査課技術主査 石松好雄



第1図 杉塚廃寺周辺遺跡分布図 (1/25000)

1. 杉塚廃寺 2. 塔原廃寺 3. 般若寺跡 4. 武蔵寺 5. 観世音寺
6. 筑前国分寺 7. 筑前国分尼寺跡 8. 崇福寺 9. 榎寺

Ⅱ．位置と環境

杉塚廃寺は、筑紫野市大字杉塚に所在する。ここは筑紫野平野の北西隅にあたり、西南から背振山塊が、北東からは三郡山塊がせまっている。これらの山に囲まれた平野は、細長く带状に東南にのび朝倉、三井郡の平野と接している。また筑紫野市は針摺、古賀、城ヶ原を結ぶ線が分水嶺となっており、この平野部を流れている御笠川、宝満川はそれぞれ博多湾、有明海にそそいでいる。かつてこの平野には「遠の朝廷」ともよばれた大宰府が設けられていた。この大宰府跡については現在九州歴史資料館によって発掘調査が行われている。この大宰府には東西24坊(2.6km)、南北22条(2.4km)に及ぶ条坊制が復原されており、その一部は当筑紫野市にも及^{註①}んでいる。したがって郭内には歴史時代の遺跡が多数残されており、また寺院跡も多い。まず大宰府政庁の東には天智天皇の発願による観世音寺がある。現在は塔心礎や講堂の礎石を残すのみであるが、近年発掘調査が開始され僧房跡などしだいにその実体が明らかになりつつある。^{註②}政庁の北西約1kmの所には筑前国分寺と国分尼寺がある。国分寺の主要部についてはすでに発掘調査が終了し、その伽藍配置が明らかにされている。次に目を南へ転じると、西鉄二日市駅^{註③}北方の丘陵上に塔心礎が残っており般若寺跡とされている。この位置は左郭15～16条、3～4坊にあたる。昭和54年発掘調査が行われ塔の基壇と推定される瓦積み基壇の一部が検出された。さらに今回発掘調査を行った杉塚廃寺の東南約0.6kmの所には塔原廃寺^{註④}があり、出土古瓦から7世紀後半代に比定されている。現在三段割り込みの心礎を残すのみであるが、この心礎の所在は古くから知られていたらしく、貝原篤信の『筑前国続風土記』にも記載が見られ「塔原」の地名の起源について触れている。この般若寺と塔原廃寺については文献の方面から両者の関係について問題が提起されており注目すべき遺跡である。

このほか杉塚廃寺周辺には九州縦貫道工事に伴って発掘調査が行われており剣塚遺跡、塔原遺跡、唐人塚遺跡等弥生時代および古墳時代の遺構なども検出されている。^{註⑤}

註① 鏡山 猛『大宰府都城の研究』 昭和43年

註② 九州歴史資料館『大宰府史跡』昭和51年度発掘調査概報 昭和52年

註③ 福岡県教育委員会『筑前国分寺』昭和52年度発掘調査概報 昭和53年

註④ 福岡県教育委員会『塔原廃寺』福岡県文化財調査報告書 第35集 昭和42年

註⑤ 小田富士雄『九州考古学研究』歴史時代篇 昭和52年

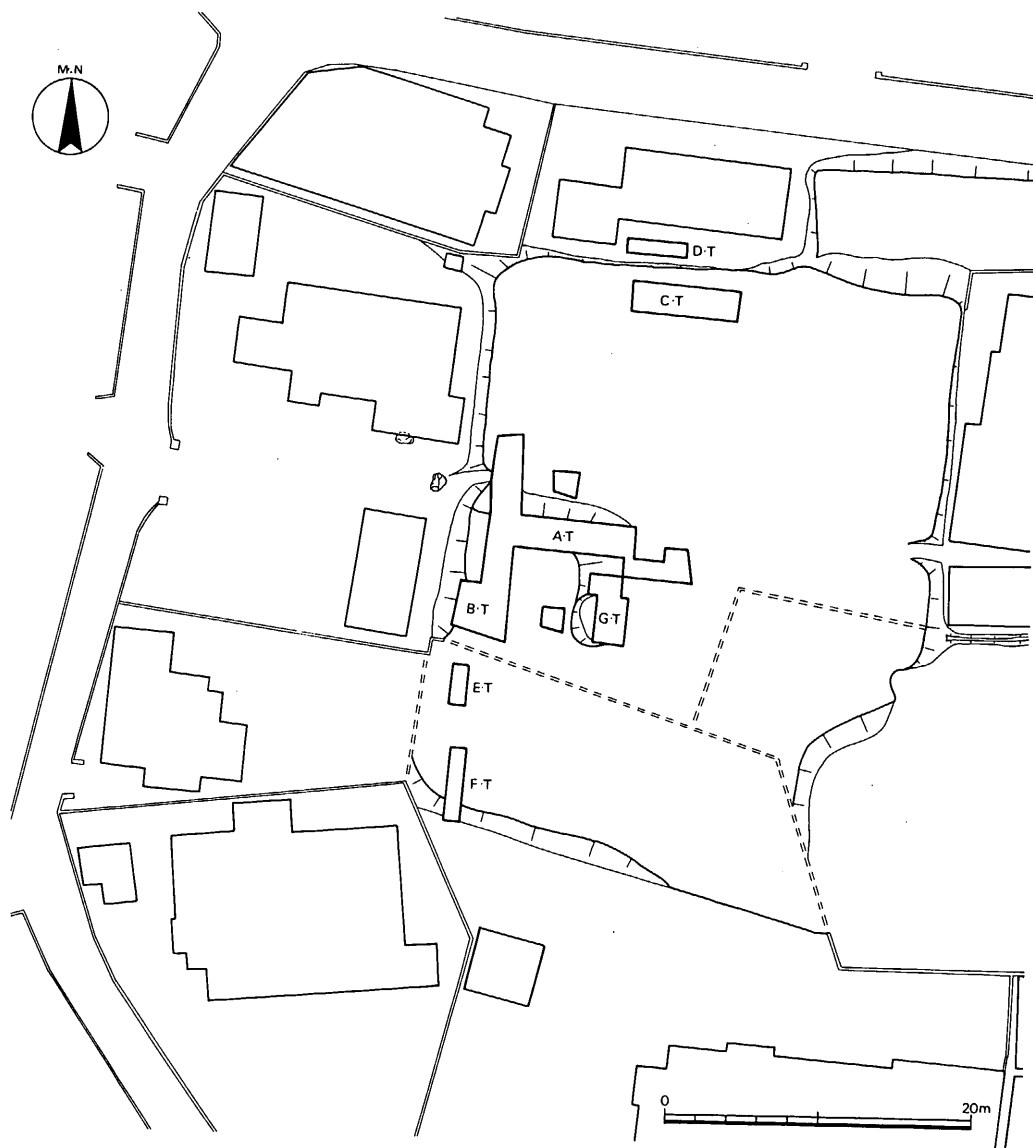
Ⅲ．調査の概要

杉塚廃寺についてはさきにも述べたごとく昭和48年4月、市道側溝工事に伴う緊急調査で掘り込み地業による基壇の一部と瓦溜り、雨落ち溝状遺構が検出されている。

今回はその地点から北へ50mほど寄ったところで礎石及び基壇の一部が残っている地点であ

り、調査に期待がかけられた。

まず、礎石の配置を確認するため竹林中のボーリング探査を行い、5個の礎石を確認した。次にボーリング探査であきらかにされた北西隅の礎石を中心に、東西、南北方向にそれぞれ長さ13m、幅2mのトレンチを設定し、Aトレンチ、Bトレンチとした。またAトレンチより北へ15m寄った地点にCトレンチ、その北にDトレンチを設定した。Bトレンチより南は表土のレベル差がほとんどなく、基壇の残りが予想されたので、それに続く形でEトレンチ、Fトレンチを設定した。また、Aトレンチに接してGトレンチを設定した。



第2図 トレンチ配置図

以下、調査結果の概要を述べる。

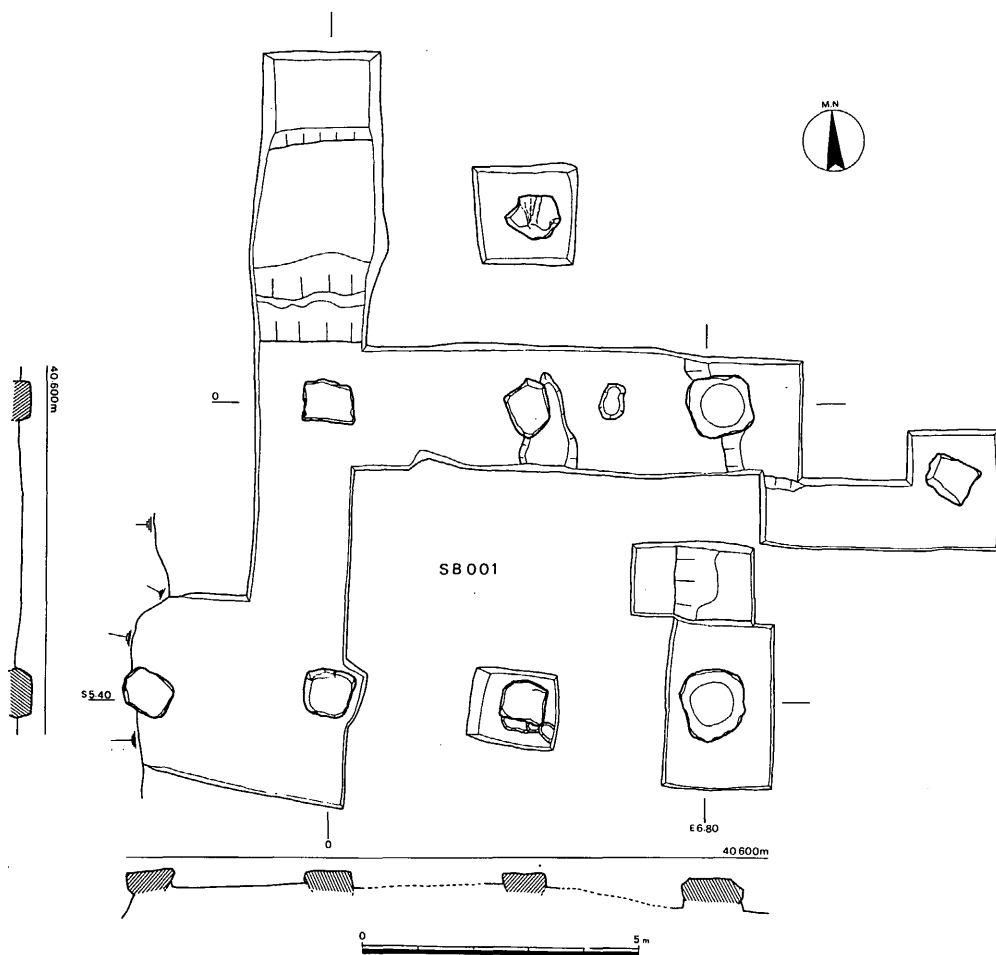
A、B、G各トレンチ及びその周辺からは、礎石9個を検出した。その詳細は後述する。またAトレンチにおいて基壇下層から完形の土師器壺、須恵器杯を検出した。

Cトレンチからは瓦類が若干出土したが、遺構は確認できなかった。

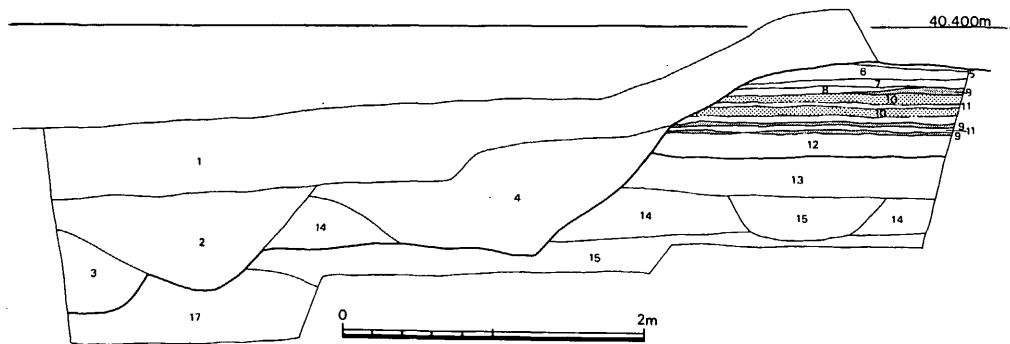
Dトレンチは家屋増築部に当たるところで、20cmほど掘り下げたところ、黄褐色の土が現われた。基壇積土かと考えられたが、精査の結果基壇積土でないことが判明した。また、この地域は南方域よりも一段下がっているが、これは大正年間に県道が通っていたとのことであり、地籍図のうえでも確認され、道路工事の際、削平を受けていることが明らかとなった。

Eトレンチでは2個のピット、Fトレンチでは遺構は検出されなかった。

IV. 遺 構



第3図 遺構実測図



第4図 Bトレンチ東壁土層図

礎石建物

SB001 一辺が10mほどの方形のたかまりにこれまでに3個の礎石が知られていたが、調査の結果合せて9個が確認された。基壇の西半分は住宅建設によって削平されている。基壇積土は表土下35cmで版築が確認されたが、基壇化粧については確認できなかった。礎石はすべて花崗岩で9個のうち北および東の2個は転倒して現位置を保っていない。またこれまでに確認されていた東側の円形造出しを有する2個の礎石も基壇積土との間に黄褐色土、黒色腐植土がかんでおり、後世据え直されていることが明らかとなった。また他の礎石には造り出しが認められない点からすると、この2個の礎石は他から移動してきた可能性がある。したがって9個の礎石のうち現位置を保っているのは5個であり、それによると柱間寸法は南北5.4m（18尺）、東西3.6m（12尺）である。また礎石据え付けにあたっては根石は使用されていない。

以上の点からみて現存している基壇および礎石は建物の東半部の一部分であると考えられる。

V. 遺 物

本調査で出土した遺物は、瓦、土器、陶磁器、土製品および石製品である。これらの遺物のうちもっとも多いのは8世紀から9世紀代にかけての瓦や土器で、次いで13世紀以降の日常什器類である。また、礎石建物SB001基壇下から古墳時代の土器が5点、一括して出土した。

土器類

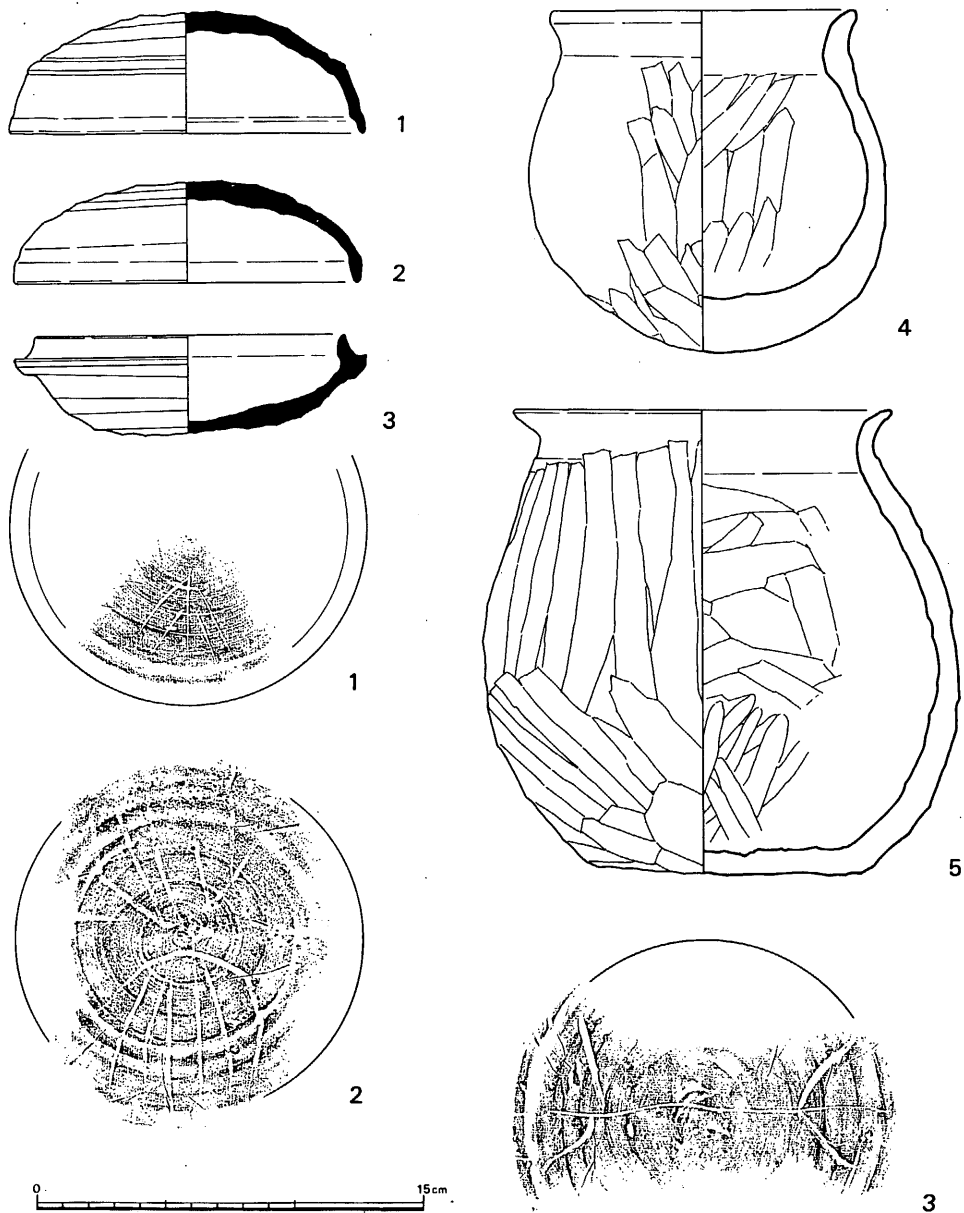
下層出土土器（第5図、図版5）

基壇下より須恵器3点、土師器2点が出土した。

須恵器（1～3）

杯蓋・杯身が出土した。いずれも完形で、天井部外面、または底部外面にヘラ記号が残されている。

杯蓋（1・2） 1は口径13.7cm、器高4.7cmを測る。天井部の端に一条の沈線がめぐり天



第5図 下層出土土器実測図

井部と体部の境は僅かな段を有する。体部はほぼ直線的に外開し、口縁部内面には明瞭な段がある。天井部には右回りの回転ヘラ削りが施されている。全体的に古式の様相をとどめるものである。2は口径13.3cm、器高3.9cmを測る。天井部と体部の境にはあまい段を有し、口縁部は直立気味に立つ。天井部は右回りの回転ヘラ削りが施される。

杯身(3) 口径11.9cm、器高3.8cm、立ち上り高0.8cmを測る。立ち上りは内傾し、途中

から垂直に立つ。底部には回転ヘラ削りが施される。

土師器（４・５）

甕（４・５） 一部を欠失するが、ほぼ完形に近い。４は器高13.2cm、口径11.8cmを測る。口縁部内外面は横ナデされ、胴部外面はヘラナデされる。底部はヘラ削りされ丸底をなす。胴部内面はヘラで粗く削り上げている。胴部から口縁部にかけて煤が付着し、胴部の一部は加熱により赤変する。５は器高18.0cm、口径14.5cmを測る。口縁部内外面は横ナデされ、胴部外面は上半部が縦方向、下半部が斜横方向にヘラ削りされる。さらに平底をなす底部にも不定方向のヘラ削りが施されている。内面は胴部から底部にかけてヘラで粗く削られ、胴部下半から底部にかけては更にナデが加えられる。底部から胴部にかけて煤が付着している。

以上、基壇下より出土した土器は、６世紀中葉～後葉のものと考えられる。

各トレンチ出土土器（第６図、図版６）

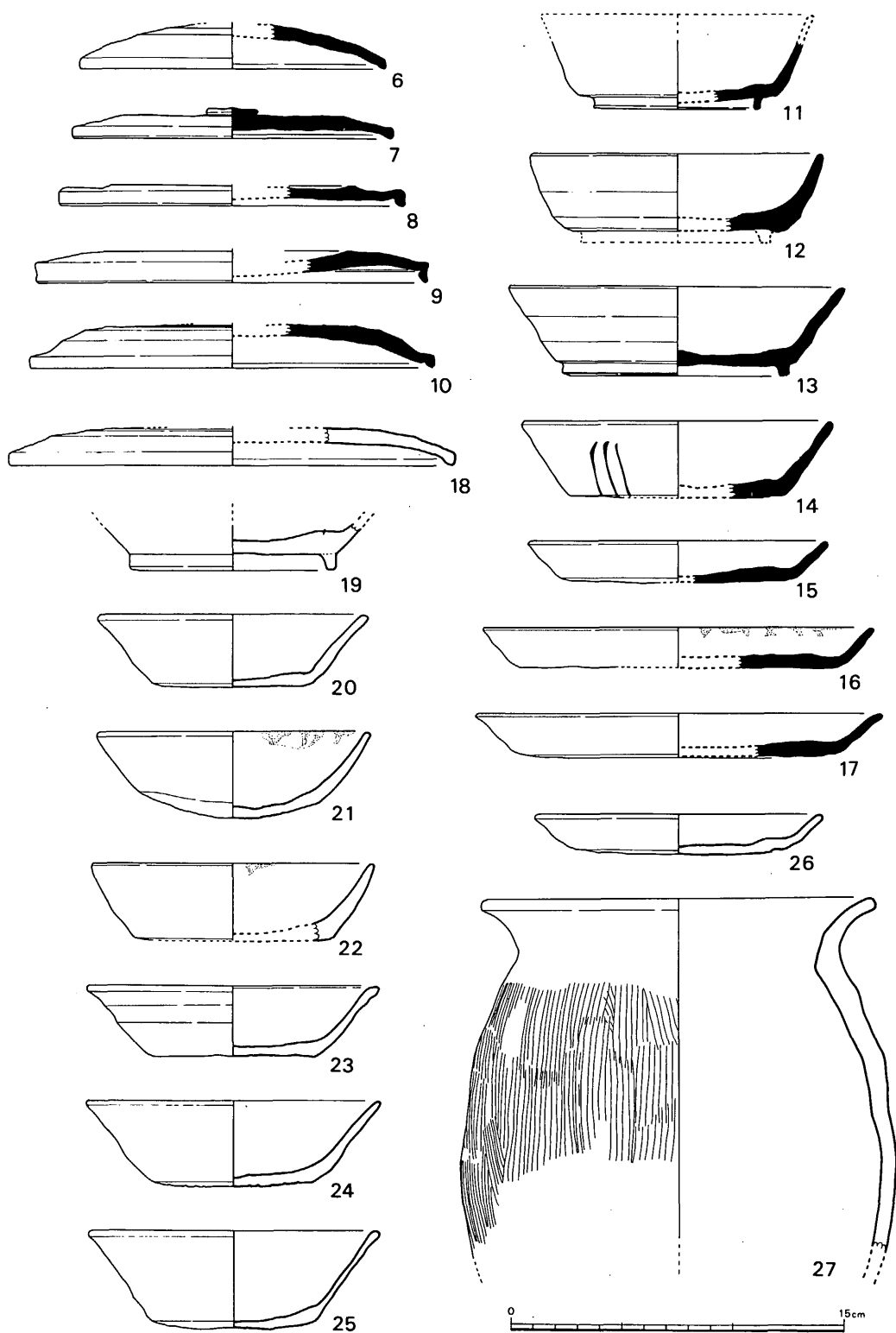
古代から中世にかけての土器が出土したが、ＳＢ００１の存続年代を推定できる遺物に限って報告する。

須恵器（６～１７）

杯蓋（６～１０） 復原口径13.7～18.1cmを測るもので、７を除き天井部中央を欠失するが、いずれもつまみをもつものと思われる。６は天井部と体部の境が不明瞭なもので、口縁内面はあまい凹面を呈す。７は扁平なつまみを残すもので、口縁端部は僅かに肥厚する。８・９は天井部と体部の境が明瞭なもので、９はいびつな形をなす。口縁は折りまげられ、嘴状につくられる。体部は折りまげられ、垂直に引き出される。８の体部内面には自然釉が残り、重ね焼きの痕跡をとどめる。１０はＢトレンチ基壇直上から出土したものである。天井部と体部の境は明瞭さを欠き、体部は折りまげられて短かく引き出される。いずれも天井部は回転ヘラ削りが行われ、９はさらに再調整される。体部内外面は横ナデ、天井部内面はナデを施す。

杯身（１１～１４） １１～１３は高台付杯である。１１はＢトレンチ基壇直上から出土した。高台は体部と底部の境から５mmほど内側に貼付けられる。器壁は薄手で、体部内面には油煙が残る。１２は高台が欠失するが、その痕跡より体部と体部の境近くに貼付けられていたものと思われる。１３の高台は１２と同じような位置に貼付けられるが、高台底面に一条の沈線がめぐる。いずれも体部内外面は横ナデされ、底部外面はヘラ切り痕を横ナデにより調整する。１４は無高台の杯でＥトレンチのピット内より出土した。体部から底部の外面には火嚢の痕が残る。体部内外面は横ナデ、底部内面はナデにより調整され、底部外面はヘラ切り痕を残す。

皿（１５～１７） １５はやや小形で体部内外面は横ナデ、底部内面はナデが施され、ヘラ切りされた底部の縁部はさらにナデにより調整される。１６・１７はＥトレンチピット内より出土したものである。１６は口縁部内面は油煙が付着し、灯火器に用いられたものと思われる。１７は内面に墨が付着し、また器面が滑らかであることから硯として用いられたものと考えられる。１６・１７ともに



第6図 各トレンチ出土土器実測図

体部内外面は横ナデ、底部内面はナデが施され、底部内面はヘラ切りされた後をナデにより調整する。

土師器 (18~27)

蓋 (18) 天井部と体部の境は明瞭さを欠き、口縁部の断面はにぶい嘴状をなす。天井部は回転ヘラ削りを行い、その後外面及び体部内面に回転ヘラ磨きを施す。天井部内面は磨滅する。

高台付椀 (19) 高台は体部と一体になるように貼付けられる。体部はほとんど欠失するが、残存する外面にはヘラ削りが認められる。内面は横方向のヘラ磨きが施される。

杯 (20~25) 復原口径12.2~13.2cm、器高3.1~4.3cm、底部径7.0~7.9cmを測る。いずれも体部内外面は横ナデ、底部内面はナデで調整され、底部外面はヘラ切りである。20はEトレンチpit内より出土し、内外面には油煙が濃密に付着し、底部は火熱により荒れている。21~25はEトレンチⅡ層上面より出土したものである。21は元来平底としてつくられたものの底部が焼成などの過程でふくらんだものである。21・22の口縁内面には油煙が付着していることから灯火器として用いられたものと思われる。24の底部には左回りのうず巻状沈線が認められ、25の底部には板状圧痕が残る。

皿 (26) 底部はヘラ切りされ、体部内外面は横ナデが施される。

甕 (27) 上半部の $\frac{1}{2}$ 余りが出土し、復原口径17.6cmを測る。口頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は丸くおさまる。胴部に最大径をもつが張りは強くない。胴部外面は刷毛目調整をし、口頸部は横ナデが施される。胴部内面はヘラで粗くかき上げられたままである。

出土土器法量表

番号	口 径	底 径	器 高	番号	口 径	底 径	器 高
6	13.7			17	18.2	13.7	2.0
7	14.5		1.4	18	20.0		
8	15.5			19		9.2	
9	16.5			20	12.2	7.2	3.3
10	18.1			21	12.3	7.9	3.9
11		8.8		22	12.7	8.7	3.5
12	13.2	9.2		23	13.0	7.0	3.2
13	15.0	10.7	4.0	24	13.2	7.2	3.8
14	13.9	9.6	3.5	25	13.0	7.5	4.3
15	13.4	10.5	1.9	26	12.9	8.9	1.8
16	17.4	14.0	1.8				

瓦類

今回の調査で出土した瓦類は軒丸瓦 7 点、軒平瓦 4 点のほか若干の丸・平瓦である。このほか杉塚在住の萩尾孫太郎氏の採集によるものがあり、ここで合せて報告する。

軒丸瓦（第 7 図、図版 7）

瓦当面の文様によって 5 型式に分類できる。

I 類 八弁単弁蓮華文軒丸瓦（1）

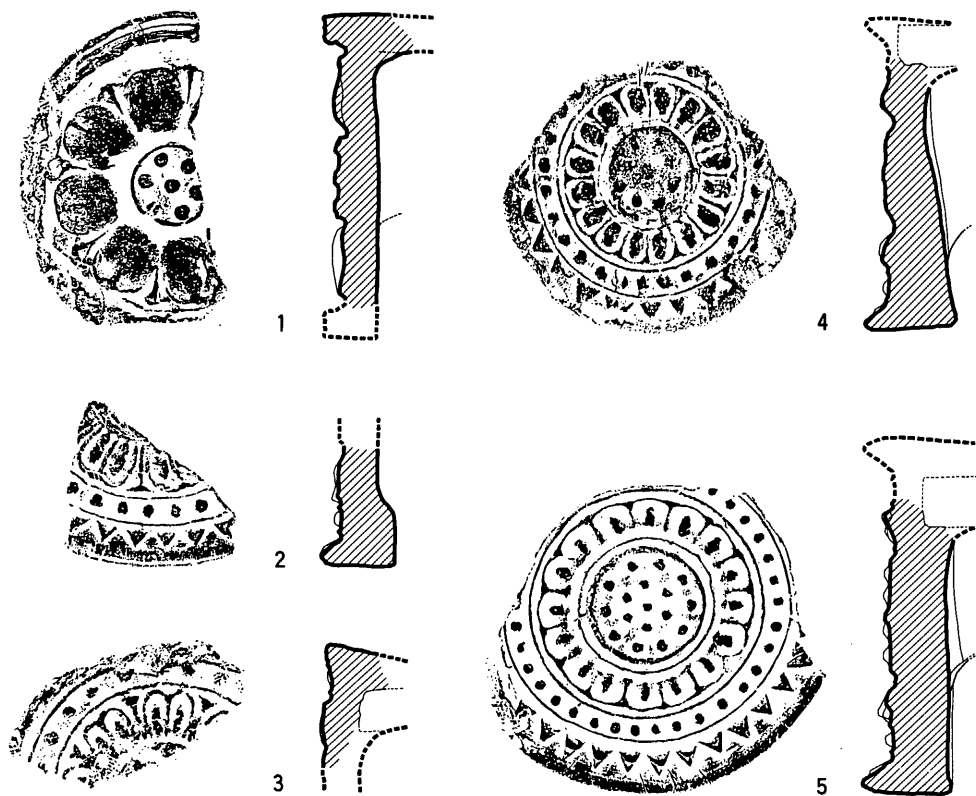
中房は一段高く比較的大きく扁平な蓮子 1 + 6 を配する。弁の反りは強く、中央に稜線が走る。外区は三本の圈線がめぐる。丸瓦の取り付けは高い位置にある。

II 類 複弁八弁蓮華文軒丸瓦（2）

老司 I 式とよばれているもので、中房は一段高く外周に一本の圈線をめぐらす。内部には 1 + 5 + 10 の蓮子を配する。弁の反りは強い。外区内縁には 31 個の珠文を配し外縁は斜縁にして外向する凸鋸歯文を配する。

III 類 複弁八弁蓮華文軒丸瓦（3）

いわゆる鴻臚館式とよばれているもので、突出した中房に 1 + 4 + 8 の蓮子を配する。外区



第 7 図 軒丸瓦拓影・実測図

の鋸歯文帯を欠くのが特徴である。類品は大宰府政庁跡から多量に出土している。

Ⅳ類 複弁八弁蓮華文軒丸瓦（４）

中房はやや小さく外周に圈線をめぐらし、 $1+8$ の蓮子を配する。弁の隆起は強いが間弁が明瞭でなく、一見単弁風に見える。外区はⅠ類と同様に珠文帯と凸鋸歯文帯で構成されている。類例は大宰府政庁跡から出土している。

Ⅴ類 複弁八弁蓮華文軒丸瓦（５）

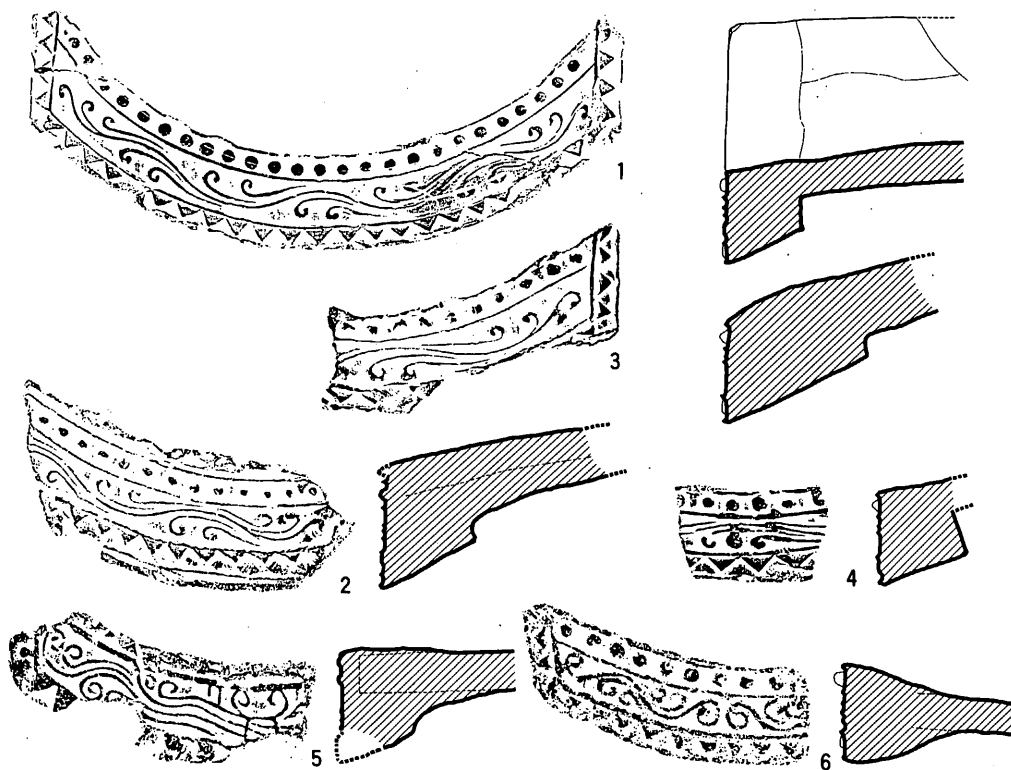
老司式の系統のもので、中房は大きく外周に圈線をめぐらす。 $1+6+10$ の蓮子を配する。蓮弁の簡略化が進み幅が広くなる。外区は珠文帯と鋸歯文帯で構成されるが、外縁の立ち上りが高い。

軒平瓦（第8図、図版8）

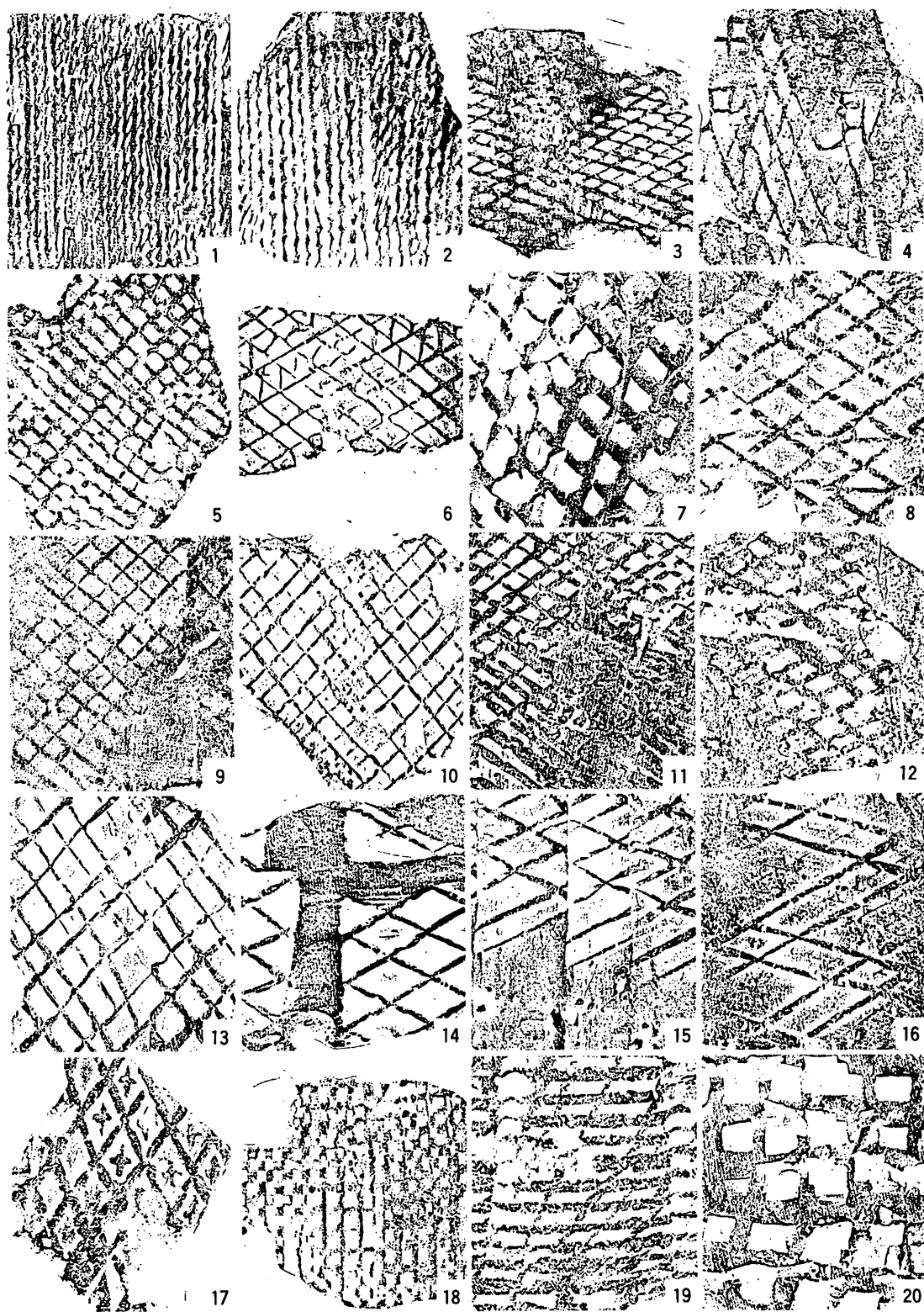
軒平瓦は4型式6種類に分類できる。

Ⅰ類 扁行唐草文軒平瓦（１、２）

老司Ⅱ式とよばれているもので、a、bの2種に細分できる。瓦当面に一本の波状線を入れ、その上下に2個の唐草を配置し、尾部を右側に流す。上外区は平たく大きな珠文を配し、下外区および両脇区には外向する凸鋸歯文を配する。顎は段顎で平瓦凸面の叩きは縄目である。



第8図 軒平瓦拓影・実測図



第9图 叩文集成图

(2) は (1) と比較して珠文が小さい。

Ⅱ類 扁行唐草文軒平瓦 (3・4)

Ⅰ類とほとんど変化はないが、内区唐草文の起伏がⅠ類と比較して一段とゆるやかになる。また下外区の凸鋸歯文がやや扁平になる。また3と4とでは唐草文に若干の相違が認められるところから2種に細分した。

Ⅲ類 均正唐草文軒平瓦 (5)

上方に開く相対曲線文の左右に3回反転する唐草文を配する。上外区は珠文で、下外区は大きな外向する凸鋸歯文を配する。瓦当と丸瓦の接合はさしこみ式で段頸風に整形している。大宰府政庁出土のものによると平瓦凸面に「平井瓦」の銘がある。

Ⅳ類 均正唐草文軒平瓦 (6)

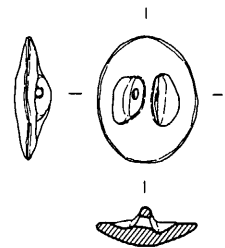
内区は左右に2回反転する唐草を単位文としてこれを3個配する異形のものである。上外区は大きな高い珠文を配し、下外区および両脇区は外向する凸鋸歯文を配する。瓦当と平瓦の接合はⅢ類同様さしこみ式である。平瓦凸面の叩きは大きな斜格子で、類例は大宰府政庁、および筑前国分寺にある。

鬼瓦 (図版7)

右の眼の部分の破片で萩尾孫太郎氏の採集によるものである。大宰府系の鬼瓦で、目および眉が肉盛り豊かに表現されている。

丸・平瓦 (第9図)

すべて小さな破片で全形をうかがい得るものはない。凸面の叩きは縄目と格子目によるものとがある。4は「平井瓦」の銘が入るもので大宰府政庁に類例がある。また6は筑前国分寺に類例がある。



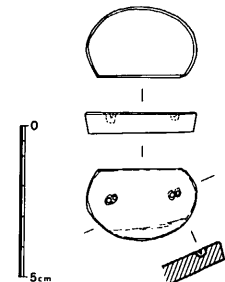
その他の遺物

土製模造鏡 (第10図、図版6)

Aトレンチ表土層から出土した。4.1×3.4cmの不整楕円形で、高さは1.2cmを測る。指頭で背面に鈕をつまみだし、そこに小孔を穿つ。色調は赤褐色を呈し、焼成は堅緻である。

石帯 (第10図、図版6)

南側中央部の礎石脇より出土した。3.6cm×2.3cm×0.7cmを測る頁岩質の丸軀である。裏面を除きよく研磨され、灰黒色の光沢を帯びる。装着用の小孔は2ヶ所に穿たれ、V字状に貫通する。



第10図 土製模造鏡・石帯実測図

Ⅵ．おわりに

杉塚廃寺については民家に囲まれた竹藪の中に基壇らしきものの一部と3個の礎石が存在することがはやくから知られていたが、これまで調査が行われたことはなかった。また本寺の位置は鏡山猛氏復原による大宰府条坊の右郭十九条、十、十一坊にあたり、昭和43年大宰府史跡発掘調査開始以来条坊制研究のうえからも注目されてきた寺跡である。

昭和48年市道側溝工事にともなう緊急調査によって掘り込み地業による基壇の一部が新に発見され、このことによって礎石の存する地域の発掘調査が強く望まれるようになった。今回の調査によって竹藪の中に残っている礎石はこれまで述べてきたように東西棟建物の基壇の一部であることが明らかとはなったが、残念ながら他の部分は全て削平されてしまっている。したがって昭和48年に検出した遺構との正確な位置関係については今回は把握できなかった。しかしながらふたつの遺構の位置関係からすると、たとえば法隆寺式伽藍配置を想定した場合、これらのふたつの遺構は中門と金堂とに比定できる可能性がある。すでに周辺には民家が立ち込んでおり遺構の残存状況についてはきわめて悲観的であるが、条坊制復原のうえにおいても重要な遺跡であり、今後さらに発掘調査を行う必要があろう。

圖 版



遠景（南から）



SB001全景（東から）



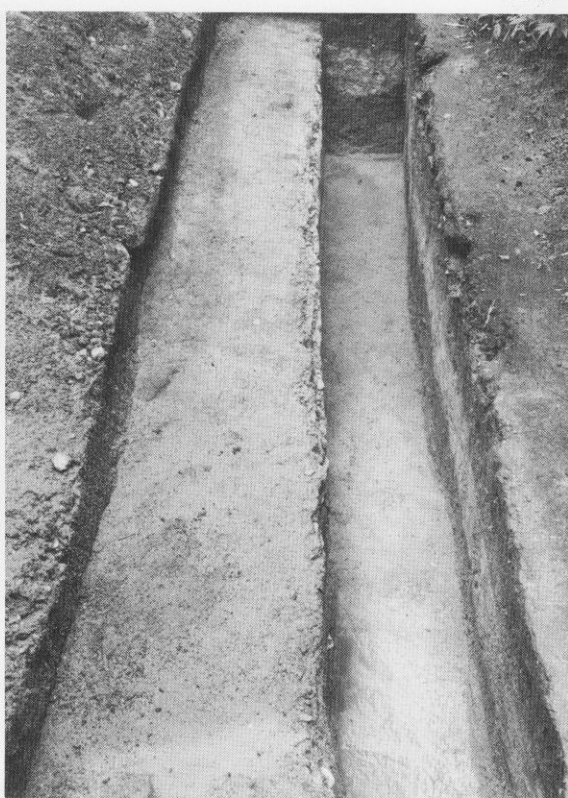
Bトレンチ（北から）



Aトレンチ（西から）



Cトレンチ (東から)



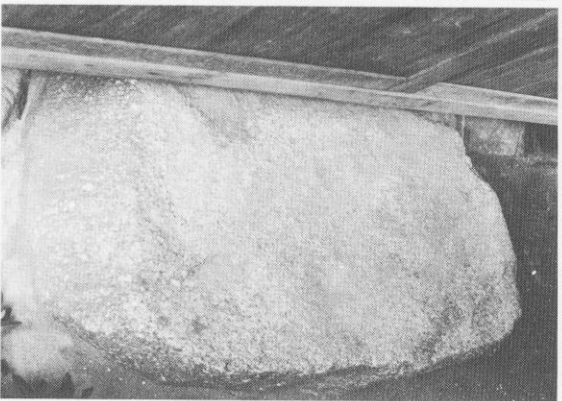
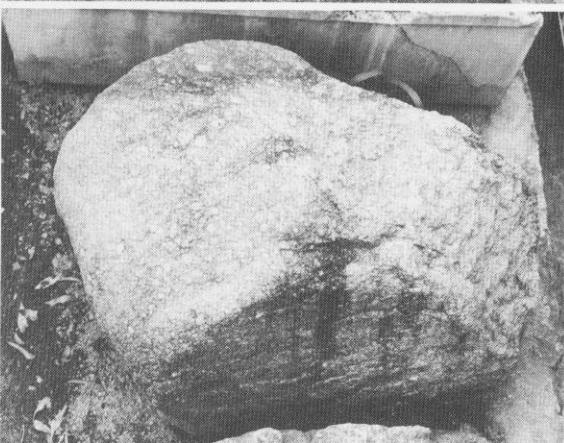
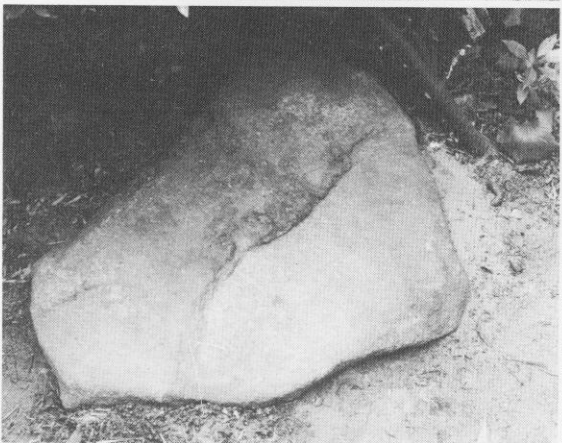
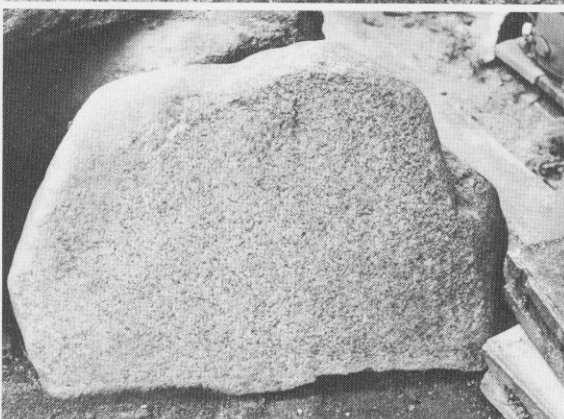
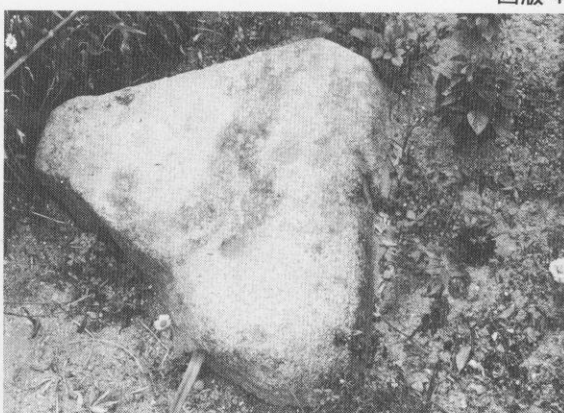
Dトレンチ (西から)



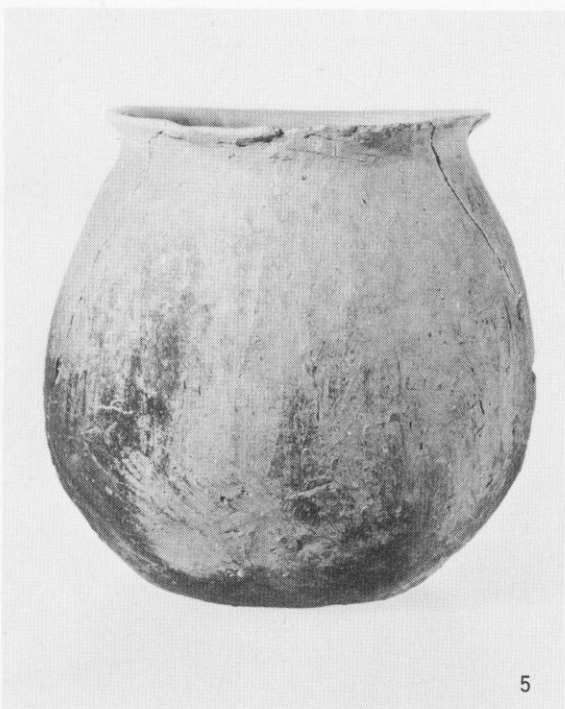
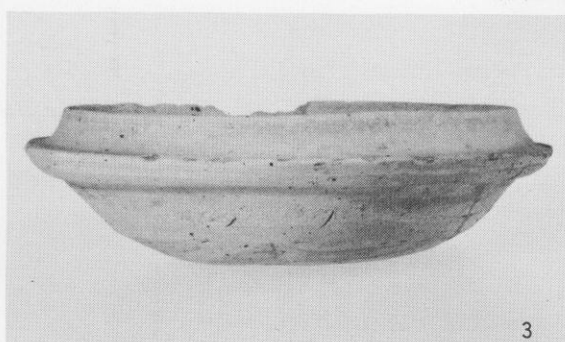
Eトレンチ (南から)



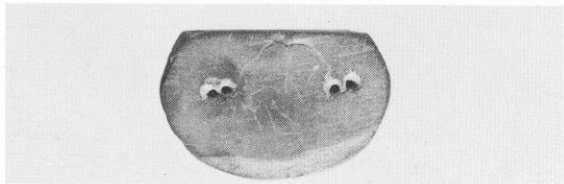
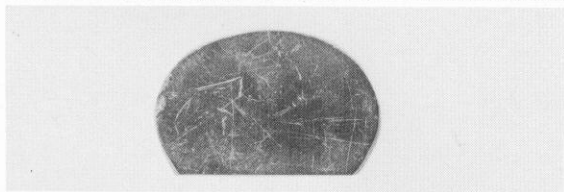
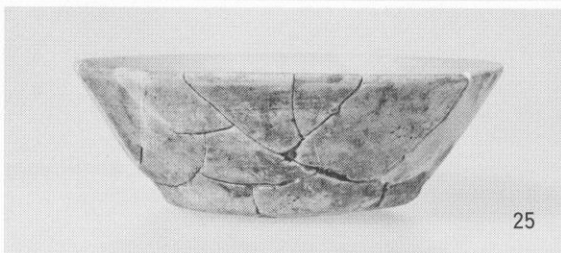
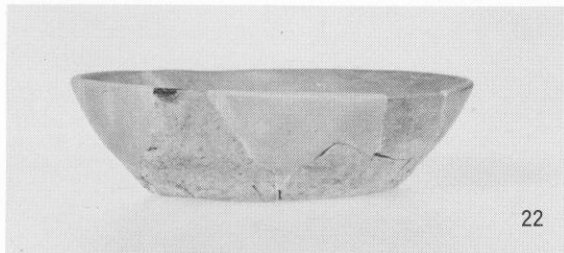
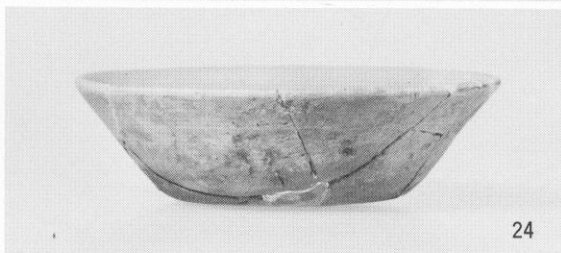
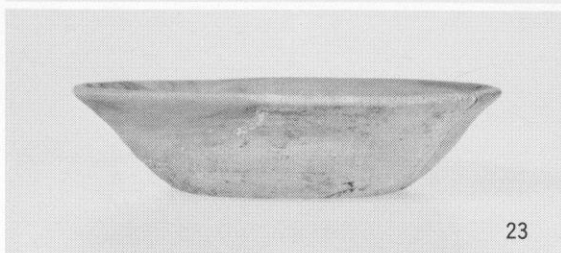
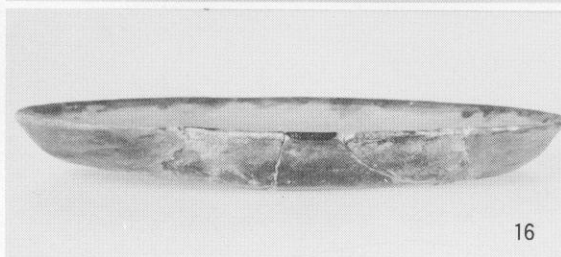
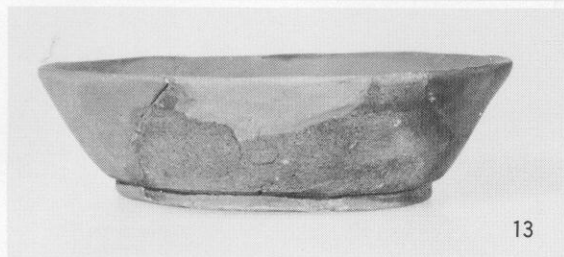
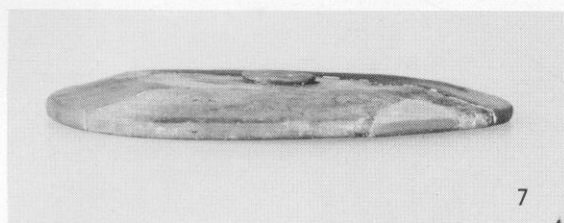
Fトレンチ (北から)



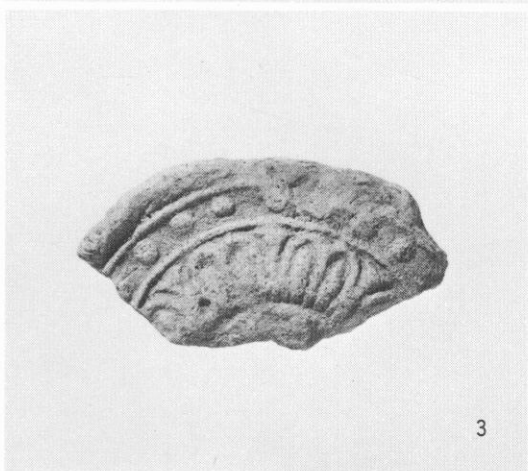
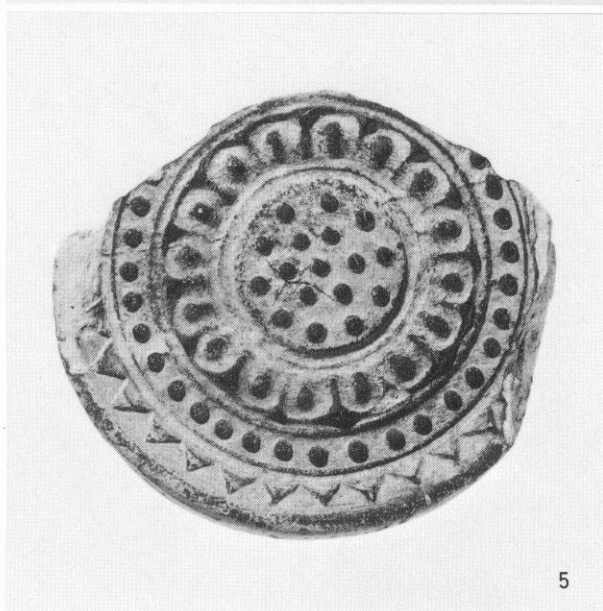
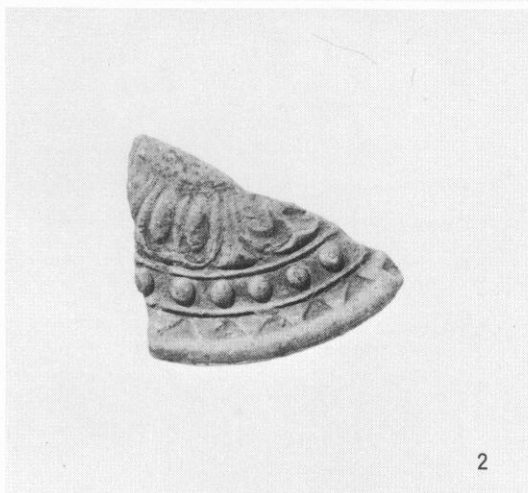
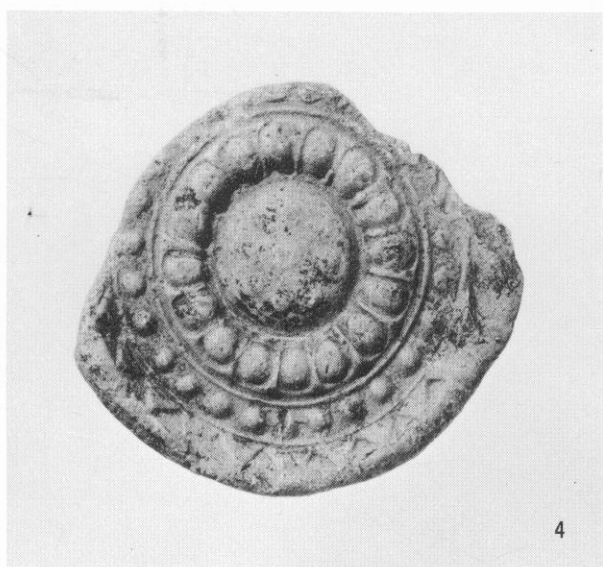
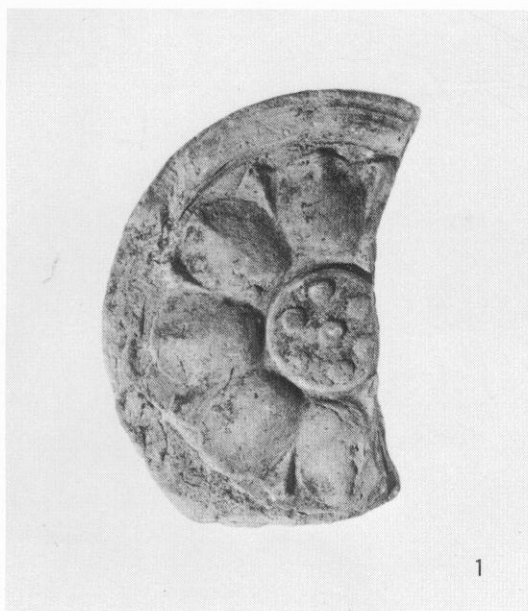
遺跡周辺所在の礎石



下層出土土器



各トレンチ出土土器・土製模造鏡・石帯



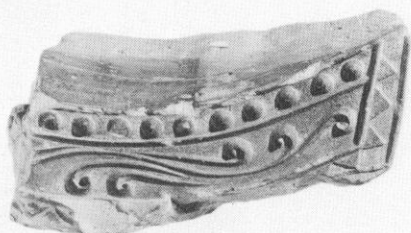
軒丸瓦・鬼瓦



1



4



3



2



5



6

軒平瓦

杉塚廃寺

筑紫野市文化財調査報告書第4集

昭和55年3月

発行 筑紫野市教育委員会

筑紫野市大字二日市753-1

印刷 瞬報社写真印刷株式会社

福岡市中央区天神5丁目5-15
